1969.7.17 明治大学新聞

バリストの経過と展望

総団交の必要なし

学生会 長 善一

夏休み前の集約として、十一日の団交をわれわれは設定した。この団交においても、大学当局の態度は煮えきらずあいまいだった。

前回は全共闘の承認をめぐってだったが、今回はその前提となる問題について論争を展開した。が、先生方の答弁は、われわれの問に対する答になっていなかった。

われわれの追及の方向性は、根底的な問題の解明に求められなければならない。そのなかで、明大闘争を闘い抜いていく部隊を有選的に結集していく。大学当局とは、権力との関係も含めて、如何に闘っていくのか綿密な検討が必要となってこよう。

二十日からの全共闘合宿において、明大闘争の理論的把握を行なうつもりだ。ここでより確固たる理論武装をし、夏休みを乗りきっていくための、左派的結束を強めていく。

現時点では、総団交は必要ではない。今後は各学部ごとの団交を行なうことを検討している。

十九日の権力の弾圧粉砕集会、二十日の全国全共闘のティーチ・イン、二十日から二十五日までの全共闘合宿がさしあたってのスケジュールとしてある。

代表者会議においては、バリケードの中で何をやるのかということに関して、白熱した論議が展開されている。われわれは、敵うまでの学友諸友とともに、明大闘争を最後まで闘い抜く。それが、学生大会で委託された全共闘の責任である。

（学生会中執委員）

学生部の再検討を

学生部 松田 孝

十一日の団交席上で、全共闘の諸君から教職員も全共闘に加わって大学立法粉砕の闘争を繰り広げるべきだとの提案がなされたが、われわれとしては、大学、教職組、専教連、職員会の四組織からなる四者連合の打ち出した線に従う以外、別行動は考えられない。しかしこれからは四者連合も一層強い抗議運動をおこなわなければならないだろう。

私に接している学生の中でやや保守的な見解を持っている者も、大学立法には反対するなど、八割近くの学生がこの法案には反対の意思を示しているはずだ。大学立法には反対、ただバリ・ストには賛成しかねるという学生がもいと聞く。

今の本学の状態であると、バリ・スト賛成者しか大学立法反対闘争に参加出来ない。このような排外的なやり方では、とても広汎な運動は推し広めてゆけないであろう。

全共闘の諸君は、電より電だといわれるが、一定の電に達すればすぐにでも雷に転化するはずである。

六項目要求の中にかかげられた「学生部廃止」の項は、私個人としての考えでは従来のような形での学生部はやってゆけないであろうと思う。ただ必要な部門、たとえばアルバイトの斡旋などのような学生の生活に密接に結びついた部署は残すべきである。学生部といった名称では続けてゆけないかもしれない。私が最後の学生部長でありたいと願っている。

やはり大学紛争は学生問題という形ではとらえられない。

（学生部長・文学部教授）

戦士としての共同体

学苑会 本間 晟豪

全二部共闘会議の結成は、これからの明大闘争、とりわけ本校地区における運動の重要な一翼を必ず担うことになるだろう。

この間、学苑会運動を既成の自治会運動から、全学闘運動への過渡的段階として位置づけたこと、とりわけクラス闘争委員会が、いま一つの成果を勝ち取り得た。

全二部運動がこの重大な転換点を自覚することのないように、より強固な闘争体制の確立を期していく。大学立法を媒介として出発された運動ではあるが、問題はむしろ全共闘運動の内実を――今日の大学闘争がすでに「教育」や「学園」の範疇を突き破り、現代の社会構造体に対する闘いをも鋭く問い抜くものとして輝いて行くことである。「戦士としての共同体」である。全共闘運動の原則は徹底民主制を軸とし、闘う全ての学生による創意された諸運動の結合体として建設されるべきである。

これらを獲得するための手段の具体化として、機関紙、講座、討論集会などの恒常的運動の開始と同時に、全ての闘う組織への呼びかけを行なっていかねばならない。

二ヵ月に渡る休みは、われわれにとって確かにかなり苦しいものになるであろう。しかし今獲得している部隊の思想的組織的強化と同時に、郵便などの手段によっても常に状況の認識の同一化を追求していく。

決戦はいみ明けに必ずやって来るだろう。

（全二部共闘会議議長）

やはり今回の団交も相変らず平行線のままで終ってしまった。やや残念であるが、学生諸君同様に大学側としてもこちらの主張を曲げることは容易でない、ただこの日の団交では全共闘の諸君が時間厳守してくれるなど、いく分紳士的な態度をとってくれたので満足している。

今度の紛争解決は早急に望めそうにもない。このような事態になって一般学生諸君に多大な迷惑をかけてしまい申し訳ない。大学の一責任者として深くおわびしたい。

団交後、大下堂ビルを占拠したのをテレビで見て驚いた。今後これがたいしたことにならないよう案じている。

私自身も率直に言ってジレンマに陥っている。大学内の問題だけで精一杯力を使いはたしてしまった。現在私は大学立法に反対しているものの、疲労困憊して目に反対しているのかという矛盾にぶつかり口惜しい妙な気持がする。

具体的なビジョンを

大学 今村 成男

大学は民主的雰囲気の強い大学である。このような基盤を利用して新しい明大に向かって具体的なビジョンを練ってゆく必要がある。私もこのようなプランニングには積極的に加わってゆきたい。

大学自治の構造が従来のままで良いとは考えていない。

大学を構成する人々が、それぞれの目的を達成するための権利を明確化してこそ、大学という一つの組織が形成されるであろう。大学とは学問を切り売りする所では決してない。

（経営学部長）